

生存者の名簿を作成して送って頂きましたので早速皆に呼び掛けて、第一回の戦友会を池袋で開き、さまざまな思いで一夜を過ごしました。次は北海道・東北・九州・最後は東京の九段に集まり一応終わりとしました。

比 島 戦 記 前編

バレテ峠攻防戦

鳥取県 岡 崎 誠 友

バレテ峠北麓・大和谷陣地で

三月から五月末までの情況

私は昭和二十(一九四五)年三月上旬、サラクサク峠でアメーバ赤痢に罹患し、単独、大和谷陣地に治療のため帰されました。

当時は連隊本部の軍医さんも薬を保有していて、注射や投薬をもらったので二日程休んで良くなりました。快方に向かった時絶食していたので、猛烈に空腹を覚えました。同年兵の獣医部下士官候補で指揮班にいた椿野幸一伍長が、私のために連れてきた軍馬を全部第三中隊に渡したので、軍馬の葡萄糖注射薬がいらなくなったので、私のために飯盒に注射液を入れ、貴重品の乾パンを少し入れて炊いて、少しずつ飲ましてくれ、元気を取

り戻しました。彼は八月下旬ピナガンに到着しながら、病死したと後で聞き何の恩返しをせぬままに病死したことは、運命と言いながら残念でなりません。御冥福を祈るのみです。

サラクサク峠から中隊は、撃部隊（戦車第二師団）が方面軍命令で、捜索第十連隊が兵力百人を割る程損害を受けたので、補強するため峠の陣地に就くため、大和谷陣地に帰ってきました。この頃、須山中尉は、第一大隊長として赴任して来られた秋山博大尉と交替するため、中隊に復帰される途中、サンタフェで敵の爆撃機の編隊の投下爆弾に依り、全治三週間の負傷を受けて大和谷陣地に帰られました。その時は第一中隊は沢山の兵隊が死傷しました。

関臨時中隊長は、須山中隊長が帰られたので、連隊本部に帰られました。瀬川指揮班長は須山中隊長の指示を受け、活発に活動しておられました。須山中隊長は指揮班幕舎より少し離れた所に、小さい幕舎を張られ当番兵と起居しておられました。

私は台湾を出発以後の移動事項を、戦時名簿に記載せねばならなかったのに、指揮班長の交替や二月からサラクサク峠への連隊輸送命令で、関臨時中隊長以下指揮班も峠に露営して輸送に従事していたため、随分記入する事項が増えました。

移動の年月日、進級があれば内容と年月日、入院があれば内容と年月日、その他指定された項目の記載などです。台湾までは久一曹長の指示により処理をしていたものが、瀬川曹長に代わってから事務処理の経験は少ないのか「岡崎、やっておいてくれ、任せる」と言って、瀬川曹長は得意な現場の指揮に行つて事務の方は私一人に任せ切りの状態でした。そのため三月も四月も、私は大和谷の深い木立の川沿いの指揮班の幕舎の中で、原利雄兵長と中藤実兵長と三人で事務処理に専念していました。

同期入隊の小畑少尉率いる徒歩一小隊（兵員約六十人）中川力男中尉（現・森姓・第二中隊親和会長）率いる輓馬第一小队と森本春実准尉率いる

輓馬第二小隊（兵員それぞれ八十人ずつ）は、大和谷陣地に必要勤務要員を残し、主としてバレテ峠を通る五号国道の東方、南山、要山方面の馬で輸送できない山岳地帯（歩兵第十連隊、高千穂落下傘部隊、鉄道連隊、その他配属部隊）に、山の中に露営陣地を設け、往復三泊か四泊の輸送をしていました。

全員背負い紐で、食料や弾薬箱を背中に載せて、臂力搬送していました。日清日露戦役より前の戦いぶりで近代戦には考えられぬ状態でした。

第三中隊はアリタオに位置し、輓馬をかなり沢山持っていて、アリタオ付近にある食料、弾薬、物資を、輓馬車両でサンタフェや国道でバレテ峠付近にいる歩兵第六十三連隊を軸に、野砲兵第十連隊、工兵連隊等に輸送し、第一中隊がサンタフェで駄載に乗せ替えてバレテ峠の前線に輸送していました。

サラクサク峠では我々が臂力搬送で最前線まで輸送していたので、山中を臂力搬送する実績を認

められて我が中隊が担当させられたのかなと考えられます。こうして三月はあつと言う間に過ぎました。

昭和二十年四月

依然各小隊は命に依り、一部陣地要員を残して小隊長以下輸送任務を行っていました。指揮班は陣地に残って三、四人で事務や、勤務割、輸送先への連絡等で夜まで忙しく仕事に追われていました。上旬に第三合流点に前哨陣地を出していましたが、T兵長とY上等兵の事故が起こり、中隊長は連隊長に相談して意外な処置をされました。この時瀬川指揮班長は、当時ではできる限りの善処をされました。今も印象に残っています。

そして、我々には戦況が知らされぬまま、四月二十三日には、国道の東の妙高山に歩兵に転科して第六十三連隊に配属の形で、タコ壺陣地を構築していた所へ、敵が兵力弱しと見たのか、三月下旬から砲爆撃を連日実施後、ブルドーザーや戦車

で山の稜線を攻撃してきました。各分隊は壊滅し、中隊長も、しまいには米倉大尉第二大隊長も戦死され、僅かばかりの兵が連隊に復帰を命じられて帰ってきました。現在この四月二十三日を連隊慰霊の日と決められています。

四月二十八日は、瀬川指揮班長が中隊命令で、第三合流点前哨陣地付近に敵兵が威力偵察に来たとの報告があり、調査を命じられました。しかしそこへ行った所に敵の猛烈な迫撃砲が撃ち込まれ、不幸にも腹部に複雑貫通弾を浴び倒れました。数人で応急担架を作り二キロ程離れた指揮班まで担ぎ込んで来ました。

中隊長は川向こうの退避壕に運ぶことと、軍医に連絡して治療させられました。その時私に「岡崎、すぐ行って瀬川の看護をしてやれ」と命ぜられました。退避壕に行くと見ると軍医と衛生兵が来ていて、既に痛み止めの注射や腹部の止血応急処置は取られています。瀬川軍曹は注射が効いたのか私に気付き「岡崎、足がだるいからさすつ

てくれ」と言われるのでさすっていましたら「岡崎、俺は彰化高女校長の娘さんと凱旋の暁には結婚する約束をして来たので、何としても生きて帰らねばならない」と何度も言われました。私は彰化での事情を知っているので「きつと良くなるから心配せぬように」としか答えられませんでした。

それから間もなく中隊長は野戦病院に担架で運び、手術を受けさせると、衛生兵を交え六人で運ばれましたが、遅くなって帰って「野戦病院では薬品が無くて手術はできないとの事で連れ帰る途中、出血多量で絶命されたので、連隊の共同墓地に埋葬して帰った」と報告を聞きました。その夜は兄貴のような存在だった瀬川指揮班長の戦死に、死に切れぬ思いで絶命されたことを思い寝付かれませんでした。

四月一日、かなり沢山の進級が発令されたので、戦時イロハ留守担当者名簿の作成することを連隊本部から命令が来て、三晩程徹夜で私一人で作成し、瀬川曹長にできたものを照合して貰いました。

現在、その原本を森第二中隊親和会長に保管して貰っています。

翌日中隊長は、四月一日曹長に進級したての堤誠之曹長に後任の指揮班長を命じられました。そして三日程してから私は、中川小隊小西分隊に編入替えを発令され、五月になってから分隊に行きました。中隊本部や指揮班ばかりの仕事をしていましたので、戦地での分隊編入替えにはちよっと戸惑いました。

私は二年兵になってから中隊本部の人事係曹長の助手を命じられ、昭和十八年一月から昭和二十年四月末まで動員で指揮班になってからも一筋に勤めてきました。今までは概ね将校、下士官と仕事をしていたので四六時中言葉使いも気をつけていまして、絶えず緊張の連続でした。しかし分隊に入ると見ると、階級の上の人は分隊長だけで、現役兵は昭和十六年二月入隊の岡本正治上等兵、昭和十七年一月入隊の私岡崎兵長、昭和十八年一月入隊の岡山繁上等兵、昭和十九年一月入隊で二

月に輸送中敵弾に当たり戦死した水野昌上等兵、同年三月名古屋で入隊した川口三四郎一等兵、榎原恒雄一等兵がおりました。後は昭和十六年八月関東軍特別大演習名目の召集兵と、昭和十八年三月応召兵と、同年九月応召兵で、編成時四十人が分隊総員でした。

昭和二十年五月

五月早々指揮班幕舎から、個人装備(背負い袋、雑嚢、携帯天幕、毛布、水筒、飯盒、小銃、帯剣、その他)を持って分隊の幕舎に移りました。分隊は小西分隊長以下病兵と勤務兵以外は、小隊長以下南山方面の輸送に行つて留守でした。聞けば輸送する物も無くなり大分形勢が悪いように感じられると残留者がぼそぼそ話してくれました。

五月中旬になり連隊本部には、師団長が兵力消耗と補給がないので、独断転進を決意され、各連隊に転進の内命が下されたようでした。輸送先から次々と大和谷陣地に帰ってきました。五月二十

日頃には中隊の携行李や嵩張る物は、アリタオ方面に後送されました。私は分隊長や分隊の皆さんに暖かく迎え入れられました。毎日が気楽で軍隊も楽しい気分になれると思うようになりました。しかし召集で入隊している人は、すべて私より年上の社会人ばかりで、何かと世故に長けている人ばかりで、大変色んな事を教わりました。現役四年兵という事で、私の行動を注目されているような気がするので、何事も率先躬行する事をモットーに心掛けました。

五月二十五日頃、中隊長は「二十七日に鈴鹿峠を経て転進を開始する。中隊援護のため、第三合流点付近が一番敵の侵入気配が強いので、二十八日から別命有るまで後衛陣地として兵八人と共に陣地死守して欲しい」と言われ、長として勤務に就くことを命じられました。三十日の夜二回敵の威力偵察を受けましたが、夜間発砲しても目標が定かでないので命中しないし、音で陣地が暴露され発見されると敵の攻撃の目標にされるので、小

銃に着剣して壕の横に置き、手榴弾を投擲できるように手に持って「三十メートル以内に接近したら投擲するよう」に小さい声で伝えました。敵が接近して来て待っている間は随分緊張しました。陣地に就いていた皆も同じ緊張を感じていたと思います。敵に発砲しなくて事無きを得たのは、後で考えると本当に幸運でした。

陣地で緊張して黎明を迎えた頃、中隊の伝令が走り込んで来て「陣地引上げ、中隊に追及せよ」と命令され、全員無事に陣地を離れ、山中の間道を駆け足で中隊に追及すべく走りました。一時間程すると明るくなり皆が助かったと感じたものです。聞けばサンタフェの国道には敵の戦車が既に通っているとの話に驚きました。我々より後に工兵連隊の兵隊が大和谷を行動していたと、後から聞いて、上には上が有るものだと感嘆したものです。

この五月までの食事の事を振り返って、思い出して見ます。

サラクサク峠で露営して輸送実施の頃は、台湾から運んで来た米や副食の乾燥野菜、缶詰、調味料等も有りましたが、三月に大和谷陣地に帰ってからは中隊携行の食糧は底をついたのか、アリタオ方面から運ばれてきた現地の粬米を食べるようになりました。初めは兵隊に配給された粬を鉄兜の中に入れ、銃剣の柄等で搗いて食糧にする予定が、大変暇をかけないと搗けないので、上川上等兵が定当番を命じられ、使役兵と共に、谷の上空の遮蔽の良い地点に、足踏みの杵と臼を使い脱穀を専門にしていました。それからはお粥ばかり作られました、粬の混入が少なくなりました。

輸送に出かける者の昼飯は、握り飯を飯盒に入れて渡されていたようです。陣地に残留して色々雑役をしている者には薯の茎や葉と一緒に炊き込んで、増量されたお粥が飯盒に半分程配給されていました。

四月から五月になってからは益々粬米の配給が減り、時には野草が沢山入った水ばかりの重湯の

ような日もありました。アリタオ付近で起居していた第三中隊や大隊本部は、緒戦の頃には果物、野菜、家禽、煙草の葉等も探せば手に入ったと聞かされ羨ましく思った記憶があります。

三月以降は空腹の連続でした。各小隊の兵は輸送の折に諸畑を通る時、炊事用の茎や葉を採集する時、甘藷は余禄で少しは腹のたしになったそうです。指揮班の兵は、やかましい須山中隊長のお膝元で監視されて暮らしていたようで、何一つおこぼれに預かった記憶はありません。毎日が空腹の連続でした。

三月から五月まで大和谷陣地に、敵の観測機から毎週撒布された宣伝ビラの事をお話します。

敵は「旬刊落下傘ニュース」を落としていました。新聞紙大で時には写真入りで、色刷りのこともあり、後で思い出すと世界ニュースはほぼ正確でしたが、日本のニュースは日本軍の士気を落とすような捏造記事が沢山ありました。

四月以降は硫黄島や沖縄の戦闘記事や写真が増えました。その間にA四判位の紙に、実名入りの将軍や政治家が、赤坂の料亭で花魁のような芸者の取り合いを面白可笑しく描いてあるものや、「日本軍が夜間の切り込みを止めたら、米軍は夜間の砲爆撃は中止するから、速やかに斬り込みを止められたい」旨のビラも沢山落ちていました。

五月に入り敵が優勢になったので、南山や大和谷にまで「岡山連隊長に告ぐ、これ以上将兵を死傷させる事は同胞愛が無いものと思われるから、揃って我が陣地に来られたら、食事医療を提供し休養を与え優遇する」と書かれたビラや、傑作は、「この紙を掲げ大声で『愛されんだー』と唱えて我が陣地に来られたら生命の保障と食事、医療、休養を十分に与えるから至急来られたい」と書いたものがありました。『I SURRENDER』をお経のように大声で「愛されんだー」と唱えよとは、誰が考えたのか良くできた物でした。

宣伝合戦も米軍に完敗だったと思いました。拾

って読んだり持っていてはいけないと通達がありました。誰かが拾って便所の落とし紙や、現地農民の作った葉煙草の巻紙用にしていました。台湾を出てから給料を貰った事ありませんでした。一月行軍中に現地住民が我々に薬交換と言った。山日本軍のペソ紙幣を子供や年寄が持っているのに驚いたものです。

五月末まで大和谷陣地に起居していましたが、本当に何も無い地帯に、良く生きて来られたと我ながら感嘆しています。

転進 昭和二十年六月大和谷陣地から

ビノンで戦闘まで

第三合流点の中隊の後衛陣地の守備について、敵の威力偵察を二回受けながら、こちらから発砲せず難を逃れ、「陣地放棄し中隊に復帰せよ」と言う命令伝達で、命拾いをして中隊に追及しました。そして鈴鹿峠を経て国道の随分東の山脈の裾と思われる森や林の中を北に向かって行軍していきま

した。我々兵隊には地図も示されず夢中で行軍し始めました。

五十五年も過ぎては、当時の地名や行動もなかなか思い出されないようになりました。六月上旬は中隊命令で弾薬や食糧輸送もしましたが、どこからどこへ何を運んだのか忘れていますが、転進しながら分隊として行動していきました。私の分隊長は尼が崎市の出身で、関特演応召の朗らかな要領の良い伍長で、私は大変可愛がって貰いました。指揮班にいた時より気分も兵隊らしく感じられるようになりました。

国道沿いで記憶にあるのは、黒川谷、ボネ、アリタオ、少し東に入ってドバックス、方面軍の弾薬、食糧の倉庫のあったアレキサンダー、それより奥のカングラン、等を覚えていきます。途中で国道に近い部落に分隊で進出して食糧探しを何回もしたと記憶しています。杵米にあり付けば飯盒一杯の炊飯をして満腹するまで食べたことも記憶しています。

六月中旬、ビータと言う部落に着いて、中隊はここにしばらく止まり、落伍者も集まった時点で、中隊長は、中隊唯一人のガス兵だった私に「防毒面を全部集め、竹藪に埋没せよ」と命じられました。使役で穴を掘り、各分隊から防毒面を集めて運搬させたりしました。その日まで寝るときも肌身離さず身に着けていたものを、体力の低下した転進道中とは言え、ガス兵としては淋しく感じました。ガスの心配が無くなったので発令されたのか、あの袋の中には性病予防のサックにマッチを入れたり、家族の写真や大事な手紙を入れたり、お守りや典範令を入れていました。

場所ははつきり覚えていませんが、牧場で飼っていたと思われる牛を捕り、料理して配られて思わぬ御馳走にありついたこともありました。そして山の中や川筋を通って、六月二十日か二十一日に土民の家が二十戸程ある「ビノン」と言う部落に着きました。土民は皆逃げている全部空家になっていました。各分隊で家を徴発して、分隊で国

道方面に食糧の徴発に出掛けました。小西分隊も
粃米を探し、携帯天幕に入れて大黒様のように担
いで帰ってきました。

翌日はずーっと国道近くに行った所、敵兵と接
触、自動小銃で射撃されたので、帰ってくる友軍
の兵隊が多く、とりやめさせられました。連隊本
部や各中隊も集まって来ました。師団の平林参謀
が連隊本部に來られ、月末頃師団長以下司令部が
当地を通過される予定だから輜重兵連隊で、前方
三キロの三つ山地帯に防御陣地を張り、別命ある
まで陣地を死守せよと命じられました。第二中隊
は約百人集結していたので、森本小隊は三つ山の
敵兵キャンプの斬り込み、中川小隊は四個分隊編
成して三つ山の手前にタコ壺陣地を掘り、この線
の死守を命じられました。

六月二十二日夕刻、分隊編成後、S中隊長は熱
発で陣地に付けないが「輜重兵が歩兵に代わり陣
地に付いて戦闘行動する事は、希有の事態で名誉

なことである。名誉にかけて奮闘されたい」と訓
示してビノン部落から送り出されました。大事な
時に熱発と言って陣頭に立たれぬ事は、満州時代
の張りきりタイプが嘘のように感じました。

それに引替え中川（現姓、森）小隊長は一人一
人のタコ壺陣地で「敵に遮蔽は充分か、上空の遮
蔽は良いか」と検分し激励して廻っておられまし
た。肝腎の折に陣地にも顔を出さぬ中隊長より、
最前線で一人一人に指導激励して廻っている中川
小隊長に、心から信頼の念に駆られたのは私だけ
で無く、全員だったと思いました。

同年兵で下士候志願し、台湾で軍曹に進級し張
り切っていた中桐広士軍曹は、編成で第一分隊長
として十二人の兵隊を連れ、国道から分岐してビ
ノンやカシブ盆地に至る道路沿いの近くを小川が
流れている地帯で一番右翼を分隊の散開地帯と決
められました。早速各自タコ壺の位置をきめ、掘
っていました。敵の斥候が自動小銃を乱射して
来たのか、中桐分隊の兵は小銃で応戦しました。

このため敵に陣地を暴露することになり、その日夕方から夜間にかけて、夥しい迫撃砲の碁盤縞射撃に遭い、全員十三人は玉砕しました。

私は第四分隊の現役四年兵と言うので、師団が持っていた捕獲品のチェコ製の軽機関銃の射手を命じられ、昭和十八年三月応召入隊の補充兵の鳥越熊雄上等兵が弾薬手になっていました。黎明時、この迫撃砲の夥しい炸裂音が気になったので、かなり離れていましたが低姿勢で見に行きました。

第一分隊の皆は夥しい砲弾の炸裂のためか影も形も見当たりませんでした。穴ぼこだらけで玉砕したことが察せられました。お念仏を唱えながら最左翼の第四分隊の機銃陣地に跳んで帰り、分隊長、小隊長に報告しました。

夜中にピリン部落に残留している炊事要員が日が暮れてから炊煙を上げ、糲の混入した握り飯二個（朝、昼用）と夜食の飯盒一杯の野草混じりのお粥及び沸かした水の入った水筒を七、八人で運んで来ました。夜が明けると朝食を済ませてから

のころか、九時前、三つ山の上に敵兵が十数人ずらりと立ち並び、二、三百メートル離れた上空に木の葉が繁茂しているこちらの陣地に向かい双眼鏡で偵察を始めました。

彼らは国道近くの幕舎からジープやトラックに乗り、通勤しているようです。十分程偵察後、山の後に休憩に下がりました。午前に三、四回、三つ山の上に並んでこちらを偵察しています。午後五時を過ぎるとトラックが迎えに来て乗って帰ります。二十三、四、五、六、七、八日まで敵は後方の幕舎から通勤していましたが、この日敵兵二人が自動小銃を腰だめでソロソロと三つ山の上から降りてきて、腰の当たりまである草の中を、時々射撃しながら味方の陣地を目指して偵察にやってきました。百メートル位接近したのでこちらも息を殺して見ていると、黒人兵で話し声も聞こえて来ました。こちらの林の下には日本兵がいると観察したのか二言三言大声を掛けてから、自動小銃を乱射してから反転、急いで山に向かって帰りま

した。

小隊長、分隊長から別命あるまで発砲禁止を命じられていたので、敵に発見されずに済んでこども命拾いをしました。その夜は今日は無事に済みましたが、明日は敵兵が沢山こちらの陣地まで進んできたなら、白兵戦となり、決死の覚悟をしなければならぬかと思いつながら露営しました。

明けて二十九日、小隊長も今日は敵と一戦を交えるかも分からぬから、こちらから三つ山の敵兵に先手を打って、軽機関銃を射とうと思うから、準備をしてくれと命ぜられました。鳥越上等兵と早めに昼の握り飯を食べ、陣地から射てば陣地を暴露するので、左側約百五十メートル程先方に竹藪があるので、少し後の小川に沿って竹藪地帯に密かに、二人は軽機関銃と弾倉を持って進出しました。中川小隊長も観測と指示にやってこられました。藪の端の見晴らしの良いところに軽機関銃を据え、伏して敵兵が、午後の定時観測に三つ山上に現われるのを待ちました。

午後一時頃、敵兵は十数人山の上に現われました。充分狙っていたので連射の引き金を引きました。弾丸は軽やかな音を立てて飛んで行きました。鳥越上等兵は私が二年兵になった後教育係で指導したのでお互いに気心も良く分かっています、連射が終わったら空かさず次の弾倉を挿入して、二、三分の間に数連射しました。敵兵は音と弾丸の飛来に驚いたのか、弾丸に当たったのか、全員が後に倒れ、山の上には敵兵の姿は見えなくなりました。念のため二連射して小川の流れている低地に機関銃を引きずるように持って元の林の下のタコ壺陣地に帰り着きました。後で小隊長に二人は称賛して貰いました。

私は師団のガス兵の教育は受けていましたが、現役兵四年兵だと言うので、生まれて初めて捕獲品のチェコ製の軽機関銃を持たされ実弾を連射しました。乗馬本分の輜重兵が機関銃を撃つなんて想像したこともありませんでした。

しばらくすると三つ山の後の敵の車両等の置い

てあるらしい地点から、迫撃砲の軽やかな発射音がしたら竹藪の付近に弾着、炸裂し始めました。口径の短い迫撃砲だったのか、迫撃砲も少なかったのか、竹藪の辺りにはかなり弾着していました。が、タコ壺陣地にまで飛んで来なくて、難を逃れました。その後敵の動きに注目していましたが、軽機関銃を連射してからは、敵兵は三つ山の上に姿を現わさなくなりました。日が暮れるまで緊張してタコ壺陣地で監視を続けていました。

夜中に歩兵と陣地交替する旨命令が下り、三キロ程奥の中隊がいる「ビノン」部落に帰りました。残留していた兵が迎えてくれて、夜が明けるまで土民の家で安眠させてくれました。夜が明けたら中桐軍曹が率いる第一分隊全員玉砕しているので、皆沈痛な気分でした。

この日六月三十日の朝食後、次の集結地、小高い山の上の盆地の「カシブ」に向かい出発しました。軽機関銃はビノンで返納し、私の九九式の小銃を受け取り携行しました。

戦後、戦地のメモ帳によると、満州を出る時の編成は二百五十人でしたが、台湾で現役初年兵が一人入院、昭和二十年一月は無理な揚陸作業や強行軍、第一大隊本部に移動等戦病死、転出十五人減、二月は現役二年兵に一選抜で上等兵に進級したばかりの水野晶上等兵が輸送に行き敵弾に当たり戦死第一号となりました。

三月は戦病死十一人、戦死一人。四月は戦病死十四人と、戦死は瀬川指揮班長が第三合流点で迫撃砲腹部複雑貫通弾により戦死の他二人。五月は戦病死七人と豊田兵長戦死。六月は転進を始め戦病死三十八人と、ビノン陣地で中桐軍曹以下第一分隊十三人に、ビノンまでに五人戦死しました。六月末ビノンまでの残存兵力は百四十八人に減りました。

第一中隊は既にカシブに先着していて、第二中隊が陣地守備の任務を終えてカシブに到着した時は、第一中隊から徴発していた糶米等食糧を差し入れしてくれたので、全員に分配され、糶を鉄兜

に入れて銃剣の柄で搗いて、飯盒いっぱい炊飯して腹いっぱい食べました。盆地の先の方は先着の各部隊の兵が、散在している家に入っていました。

比島戦線必死の転戦

と慰霊旅行

兵庫県 西谷 武夫

私は、大正十二（一九二三）年一月一日、兵庫県高砂市（当時は高砂町）に生まれました。

昭和十八（一九四三）年徴兵検査を受け、第一乙種合格。昭和十九年四月一日、兵庫県丹波の篠山の中部第一一〇部隊へ現役入営しました。その当時は、開戦当初の戦勝態勢はなくなり、段々と劣勢敗戦への嫌な気分が出始めた頃で、旗の波や歓呼の声、そして軍歌の高唱もなくなり、親族兄弟にまもられての静かな首途かたじけなくでありました。

故郷の町外れの国鉄「宝殿」ほうてん駅より父と二人だけで車中の人となり、福知山線を北上して篠山北口で下車、約四キロ程歩いて父に見送られての営門通過でした。

私が入営した時の家庭の状況は